芸術観光学の理論と実践⑲

伊藤整『幽鬼の村』紀行

―幻想と現実のあわいを歩く―

佐藤 義雄、平居 謙

緒言

小説を読む場合、一般的には登場人物を巡る「事件」の顛末に読者は気を遣うことが多い。主人公の恋は実るのか、復讐劇は完遂するか。主人公が国家的犯罪組織をどのように壊滅させ得るのか等々。ストーリー展開は小説を読むうえで確かに強い牽引力を発揮する。また少し読み馴れた読者ならば、それぞれのシーンにおける登場人物の心理描写の巧みさといったところに目を向け、それを楽しむこともあるだろう。若年層の読者にはまどろっこしく思われるだけの風景描写を「小川の流れている感じなどとても上手い具合に書けている」などとじっくりと味わうレベルになれば、読者としては高級な部類に属する。

もっともそのような場合―たとえ上記のごとく「自然描写」に目を向け得るような場合―であっても、小説に出てくる実際の地名や地形、道の枝分かれしている様子、村落の位置関係、突然現れる橋や鉄道の線路。それらのアイテムに「負わされた意味」にまで思いを馳せる読者はそれほど多くはいないはずだ。というのも多くの読者は、明らかにそのようなトレーニングを受けて来なかったからである。学校教育の中で教え込まれるのは「的確にストーリーを把握すること」であり「主人公の気持ちの推測」であり「その他の登場人物の行動の理由を考えること」がそのほとんど全てを占めるのである。

佐藤義雄は『文学の風景　都市の風景』（2010 年）『文学の認知空間』（2020 年 いずれも蒼丘書林刊）において「図像の転換」を提唱する。これらの書物に収められているのは、上述のような人物＝「像」中心の読みから、小説に描き出される場＝「図」へ注目することで可能になる視線転換による新しい文学鑑賞の方法論であり実践である。小説はどのように読んでも構わないのだが、図像を転換すると見えなかったものが確実に見え始めるというのが佐藤の信念である。

本稿執筆の時期、師・佐藤義雄に帯同して大浦半島を歩いた。台風の合間を縫うようにして企画された三島由紀夫『金閣寺』を巡る、師と数名の卒業生たちの小さな旅団*による細やかな旅であった。そこで得られた発見の「読み」への反映は佐藤自身の論を待ちたい。その旅の中で作品の舞台となっている場所の歴史を知り、実際にそこを歩き、再度テキストに戻る時、まさに佐藤が言うように「テキストは明らかに表情を変える」ということを本項「緒言」筆者（平居）自身も実感したのであった。「作品」を熟読した上で現地に赴き再度作品に戻る「作品紀行」とでもいうべき方法は、観光学に対しても援用すべきもので、筆者としても様々な試み**の中でその方法を探りつつある。

以下展開する「本論」は２度にわたる長期の小樽・塩谷踏査の上でなされた「芸靴観光学の理論と実践⑰　伊藤整『幽鬼の街』の小樽―文学紀行という方法―」（本誌第２号　2022 年３月）に継いでなされる佐藤義雄による２つ目の「伊藤整作品紀行」である。しかし続編というよりもむしろ独立した輝きを持ち合わせているように思われる。それは、伊藤整の『幽鬼の街』と『幽鬼の村』とが密接に関わりながらも、つまりは一見続編のように見えながらも、全く次元の異なる形而上詩（佐藤の謂い方によれば現代の「歌物語」ということになる）としてそこに独自の存在感を示しているという関係とどこか似ている。

なお本稿の執筆分担はこの「緒言」を平居謙が執筆。以下の本論〈「幽鬼の村」を歩く〉は佐藤義雄によって成された。なお以下の「本論」は、総合文藝企画 MJSK 提供のオンデマンド講座「近代日本の文学を歩く―文学の認知空間」における講義「伊藤整『幽鬼の村』」（2022 年度 4・5 月配信）を基に加筆修正されたものである。（平居謙）

本論

1-0　はじめに

幻想のテキストが現実の空間に支えられてひとつの < 歌物語 > として成り立っているというちょっと無謀の論。幻想の村の「紀行」など出来るわけがないことを始めようというのである。「現実の場所に過去の幻想をむすびつけた」（カッパブックス版『街と村』「あとがき」1955 年）という作者の自注をたよりに。

1 - 1　林檎園にて

幽鬼の充満する小樽市街地にいたたまれなくなって、「私」は山林の中の道を「私の村」に向かって歩いてゆく。塩谷街道（国道５号線）ではなく道道９５６号線だろう。この道は軍用道路とも呼ばれていた。「若い詩人の肖像」（1956）の「根見子」と歩いた道である。ここを通った人の列挙。普通塩谷街道を辿るはずなのに、なぜこのルートをとったか。ここが整の「ふるさと」だったからだ。五助沢分教場（簡易教育所）は塩谷駅から三キロほど、小樽の山の手緑町の商科大学あたりまで二キロ。軍隊勤務の後、道内を移動し続けた父伊藤昌整が塩谷に定着したのは、まずこの分教場の教師の職を得てからであり，整も幼い時ここで過ごした。住居と教室は兼帯。

塩谷での子ども時代の自伝的小説「子供暦」（初出不明）のうち、「玩具の思い出」と「分教場」はここでの少年時代の出来事が語られている。ただし、なぜか五助沢ではなくて、一つ北側の沢である徳助沢となっている。「後年彼はほかの土地へ旅行しても、ふと丸みを帯びた山や、そのかげにひっそりと日を浴びている農家などを見ると、心が温かく、眠たくなるような幸福感に落ち込むのであった」。塩谷を代表する山は文字通り「丸山」。その麓にたくさんの沢が横たわっている。

伊藤整は草深いこういう「自然」の中で幼少期を過ごした。「自然」派と自らを認識するのは当然である。村への入口は五助沢（らしき空間）。村の入り口はテキストの入口。銀行街や演芸館に代表される「幽鬼の街」の風景とうって変って、様々な草木に囲まれた世界。その世界が「蕗になる」の引用で開始される。

落葉松の緑やすももの花、そしてうぐいすの声がこだまする谷間の空間。なぜ「わたしひとり　こうしてひつそり歩いてゆくのだろう」。と繰り返し問いかけながら「ああ　誰も気づかないまに　私はきっと　木の下で一本の蕗になるのだ」と、植物と同化するかのような幻想の世界から物語は始まっていく。雨上がりの谷間の冷えた空気の中で感じられる孤独は透明である。

港の街での昨夜の混迷は自然によって洗い浄められたかのようだ。だが、なぜ村へと「私」は歩いているのか。あるいは蕗になってこのまま自然と同化してしまいたいというのか。最後には蕗ならぬ海鳥に「私」はなってしまった。「村」の世界がこういうひそやかな転生願望から始まっているのは十分に考慮されるべきだろう。

「幽鬼の村」（以下「村」と略記）は「幽鬼の町」（以下「街」）と異なり、自身の詩の引用を中心にして展開する。現代の「歌物語」（瀬沼茂樹が河出版全集第二巻「解説」でほんの一言だけその点について触れている）。『雪明りの路』（および『冬夜』）の世界を前提とすると、テキストにあるふくら

みが生じてくる。「歌物語」とはそういったものだろう。例えば『伊勢物語』は『古今和歌集』と重複する和歌を含むが、『古今集』の詞書を長大化したと考えられる章段が多いのはよく知られている。歌はある感情に焦点を合わせたものだが、物語や詞書はその感情の発生する局面を全体的に明らかにしてゆく。抽象化され凝縮された「ある感情」の具体的全体的状況が明らかになっていく。「詩」と「物語」の総合表現。詩は詩の，散文は散文の面白さがある。その組み合わせが調和した時、テキストはより高次な段階に達する。

あるいは「抒情」と「抒情」が成立する具体的条件。情感を漂わせつつその「情感」が生み出された「現実」的基盤。逆に「現実的基盤」の上に建つ「情感」。「詩」の持つ情感と「散文」の持つ「リアリティ」の融合。こういう方法も日本の古い「歌物語」ではなく、「ユリシーズ」から学んだもののようだが、「実験臭」はない。小樽時代のすべては『雪明りの路』にあり、この詩集にはその頃の情感の上澄みがすべて集約されているから、作者自身の詩の主人公は「私ではない」というくりかえしての弁明にもかかわらず、自然で「借り物」感がない。その『雪明りの路』は小樽でなければほとんど塩谷の村だからである。

場面は半ば打ち捨てられたりんご園。このりんごは伊藤整の読者にとってなじみの果樹。具体的には余市のりんご園を想起させる。余市に近い塩谷にはテキストに書かれているようなりんご園事情もあったようだ。だが山間部を中心にりんごは作り続けられたらしい。北海道における西洋りんご栽培の歴史については、小笠原克の「林檎の花―啄木の歌一首・その受容」（『< 日本 > に架ける橋』1972所収）に説明がある。北海道開拓使によって東京の青山官園（やがて東京農業大学となり現在は青山学院となっている）にアメリカから移入されたりんごは、やがて札幌育種場と七重官園試験場に移されそこから北海道各地へ、東北各地へと広がっていった。塩谷から入った丘陵地帯を走って余市・仁木に至る道は今は「フルーツ街道」と呼ばれている。余市のりんご栽培は仁木などその周辺に果樹栽培を広げていった。エリートめいた男女の「青春」（1938）は、ここの咲き乱れるりんごの花のイメージとともに咲いていた。

りんごは後志（しりべし）の果樹であるとともに、詩人伊藤整を育てた「十五歳の僕にとっては完璧無上の抒情歌」（「自伝的スケッチ」1938）であった「藤村詩集」の果樹。現代と違い「西洋」の田園の香りがした。つまり、りんご園は余市の少女、「若い詩人の肖像」の「根見子」との恋愛の記憶を引き起こす場としても『雪明りの路』に表象された。

「村」のテキストは「林檎園の六月」の引用によって彩られる。りんご園にはここを捨て去っていってしまった家族が住んでいた。「私はその人たちのことをよく知っていた」。だが、引用された「林檎園の六月」はその家族を歌ったものではなく、去っていった少女への消えやらぬ哀惜・愛着を歌ったものであることは現在の伊藤整の読者なら一読了解できることだ。

りんご園にはここを捨て去っていってしまった家族が住んでいた。「私はその人たちのことをよく知っていた」。だが、引用された「林檎園の六月」はその家族を歌ったものではなく、去っていった少女への消えやらぬ哀惜・愛着を歌ったものである。「村」のチヤ子は「根見子」とは全く別の少女であることも「若い詩人の肖像」の読者なら自明のこと。「林檎園の六月」を「歌物語」へと変換するために、作者は「根見子」を「チヤ子」へと移し替えるというかなり強引な操作を加えたのである。

りんご園で兼子の爺の幽鬼が「佐山家」の消息を語りかける。「モデル」というのではなく、あくまでも「素材」としての「チヤ子」の坂西家の事情―一坂西家はここを捨てて去ることなどしなかった。その話を聞きながらおしひしがれた草の匂いが思い出をよみがえらせた。「林檎園の月」。

「紗のような」月明かりの照らす林檎園の「まつ白い花ざかり」。「そのひとは　月光の降るなかを」微笑んで歩き、「わたしはゆめのなかのように　じぶんをわすれて　すべてゆるされるとさえ思おうとした」。「妖しい花の精に憑かれ」て。

古い情感がよみがえり「気をうしなう直前のようなあいまいな雰囲気の中に私を漬け」、鮮やかに恋愛の情感がよみがえる。「林檎園の六月」も「若い詩人の肖像」では「架空のシチュエィション」となっている。ならば「林檎園の月」も同様だろう。だが、場面が虚構だからと言って、恋愛の恍惚と剥落がりんごの花に彩られてのものという詩人の感性までも疑うことはできない。「街」において恋愛はすべて「人でなし」の私の様相のもとに露悪的にふりかえられていたが、ここではようやく甘美な記憶として正面から回想されている。

回想はりんご園で聖書を読む「佐山」の「お捨おばさん」に移ってゆく。お捨おばさんの聖書とりんご園と――ここは草深い谷間の空間ながらハイカラである。「お捨おばさん」は「美しいなめらかな関西の言葉を使った」。

佐山家――お捨おばさんとチヤ子は五助沢の住人としては特異な存在。家族はキリスト教徒で、上の娘はアメリカにわたって「大した学者で、大学の先生」になっているという。全くの虚構に見えるが「素材」はあった。坂西志保。『坂西志保さん』（国際文化会館 1977）には略年譜が付せられている。自伝性の強い「子供暦」には中西さん（坂西さん）の父について、「この人は、その頃四十歳ぐらいであったろうか。頭はだいぶ禿げているが、頬の赤い面長の人で、時々分教場へ来て（父の　注付加）五助と話し込んでいた。（略）息子や娘は東京や外国にいるということであった」と書かれている。

年譜によれば、坂西志保は、1896 年、北海道尻別国忍路郡塩谷村字津軽野番外地櫻井農場にて、父坂西伝明、母イクの次女として生まれる。伝明は新潟人で、明治２７、８年の頃、横浜居留地の巡査をやめ、桜井農場に入植していた。両親はクリスチャンであり、シホに幼児洗礼を受けさせている。幼少時シホは父から英語の手ほどきを受ける。以後彼女は五助沢分校に入学、塩谷小学校を経て小樽のミッションスクールローズ校（遺愛女子校）に住み込んで卒業、横浜に出て捜神女学校を卒業。1921 年横浜関東学院の英語教師になった。それ以降の彼女の知米派の「知識人」としての活動はよく知られている。

チヤ子は前夜ヨシ子が、「つとむさん」が惚れていた少女で「天売さ売られで行つたんだよ」と語っていた少女。おばさんが読むのは悪鬼レギオンの一節である。お捨おばさんはしかし、レギオンが救済される一節まで読むことはない。この「レギオン」がそもそもの小説の方法の端緒。新約聖書の「マタイによる福音書」第八章終盤、「マルコによる福音書」第五章前半、「ルカによる福音書」第八章中盤それぞれにイエスが「レギオン」と名乗る悪霊を祓う記述がある。「レギオン」は本来ローマ兵だから常に複数形。つまり、誰にでもとり憑く。石段のところでチヤ子が告悔しているのを聞く。彼女によって「私」の悪事が明るみに出される。自分を愛していると言いながら「蟹工場帰りのはしたない女の人」との悪い噂を呼び、それをとがめた時の「悪魔」のような「あの人」= 私の「鬼のような心」。

彼女の言う通りだが、「私」は「もっと先にある何かのために私のほんとうの心を、ほんとうの涙と感動とをとつておいた」のだ。だが、今にして思えばチヤ子の言葉や愛情が至上のものだった。もう誰も待っていない。――「若い詩人の肖像」における「根見子」を失っての感想がチヤ子に代理投入されているのである。チヤ子は坂西志保姉妹とは無関係であるばかりではなく「根見子」ですらない。華やかな恋愛の根底に流れる「私」の「うしろぐらい罪と穢れ」（平野謙」）をキリスト教の雰囲気の中で坂西家の人々を借用して描き出そうとしただけのことである。この雰囲気は村に流れる伝統的で民俗的な仏教的な世界との対照を造り上げる。

待っているのは亡鬼ばかりだ。いや、「兼子の爺つちや」自体もう亡くなっているはずで、つまり、亡鬼だった。周囲が幽鬼だらけなのではなく、「兼子の爺つちや」も私も幽鬼レギオンそのものなのだ。

1 - 2　村へ

「私」は谷間を抜け麦畑のひろがる平地に出、村はずれの「植田」の家を覗いてみる。五助沢から道道（軍事道路）を辿れば塩谷の駅の前にたどり着いてしまう。五助沢川にそったこの道をさらに進むと伊藤整文学碑が建つゴロタの丘から国道（塩谷街道）に合流する。つまりテキストの記述にそぐわない。途中から山道を通って国道に入り込んでいるのである。軍事道路と国道の間にはいくつもの山道があった（山崎澄子さん）。麦畑が広がる高い平地。そこから村は一望できる。

村はずれの「植田」の家。「私」は既に少年になっている。そこで「白痴のような非人情さと隣り合わせになっている」、「光り輝くふしぎな魅力のある悪の世界」の少年である「定助」にたばかられ、泥棒の汚名を着せられ逃亡の身となる。井戸小屋で「定助」に遭遇し彼に殴りかかるが彼はただ殴られている。彼もまた幽鬼だから平気なのである。

虎杖の咲く村への入口付近

通有のイメージではないと思うが、伊藤整は様々なタイプの塩谷の子どもたちの世界をたくさん書いた。ほのぼのとしたものもあるが、子どもたちの多くは強い個性を持っていて悪事にも手を染める。穏やかな「児童文学」の登場人物などでは全くない。塩谷の村の子を伊藤整は大きく浜の子、往還の子、山の子と分類している。浜の子は東北から移住した漁師の子。気性が荒く暴力的で往還の子や山の子を支配しようとする。往還の子は商人や教師や役人などの子。勉強ができ先生にも可愛がられるが気迫に欠けている。伊藤整少年はこの部類。山の子は関西からの開拓者の子たちが多い農民の子で常に浜の子に圧迫されている。だが、粘り強く開明的な「フロンティア」の精神に富んでいる。中西（坂西）一家はその典型である。テキスト冒頭の道を通り過ぎて行く人々の中に、伊藤整は何気なく、しかし精読すると際立つような形で「やがて青年が来る。それらの谷間の開墾の主となる。からだが黒くほつそりとしているくせに頑丈で、我欲と意志の強い青年たち」として「列挙」していた。坂西志保の父もこういう青年であったわけだ。こういう類型化と分析は伊藤整が得意とする領域だった。

小さな村も大人の社会のひな形だった。誰でもがそうであるように伊藤整もここから「社会」を学んでいった。戦時下という時世で子供の世界に遁走したと伊藤整は振り返っているが、村の子どもたちを描く伊藤整はいかにも楽し気である。浜の子の代表的な存在が杉澤仁太郎。「漁村特有の勇壮活発な気質の上に、情に厚く、人なつっこいことで子供たちの人気を集めた」（曽根博義『伝記 伊藤整』1977　六興出版）。川崎昇や瀬沼茂樹とともに伊藤整にとって生涯の大切な年上の友人である。

定助は「悪」によって輝く存在となる。「悪」には「生命」が宿っているという後の伊藤理論のはやい例が挿話ながら、ここにもある。ずるがしこい「定助」は谷崎のテキストの少年であるかのようだ。

2 - 1　民俗的世界（1）

「定助」の勧めで「道の真ん中を川が流れ」ている往還の「川端の婆」の家に辿り着く。「川端の婆」は巫女。彼女の口から「髷田」の爺の声がする。爺は「別家の娘の洋子」に関係する男（「私」）がこの村に帰っているから追い払えと告げる。「私」は東京で洋子をかつて泊めてやったことがあるだけなのに。ことはひたすら「私」の「罪と穢れ」の累積のため。

この巫女の口寄せから「村」の民俗的世界が始まっていく。「街」と異なって「村」には、イタコの口寄せ、民話、和讃など、かなり意図的に民俗世界・民衆世界が取り入れられている。手法自体は「ユリシーズ」から学んだものだろうが、伊藤整の手によって、塩谷の世界が精彩あるタッチで描かれているのであって、決して「借り物」などではない。「塩谷もの」の多くは村の民俗世界・民衆世界の中での人物たちである。そう言っては間違いになってしまうが、伊藤整の「塩谷もの」は北海道の小漁村の貴重な「生活史」を語ってくれているテキストでもある。

巫女にはさらに「吾一」の幽鬼が憑依し、「私」の過去の悪事――「マギリ」（小刀、小型包丁。アイヌ民族の使用する万能ナイフ）をなくしたことを「吾一」の盗みのせいとした――を暴く。小さな悪事だが、「罪と穢れ」の記憶として今も消え去ることはない。

「村」の直前に発表された「塩谷もの」の一つに「隣人」がある。隣家の貧しい駅逓である「兼重」の家族のスケッチである。駅逓の起源は江戸期の松前藩の交通政策によるもの。宿泊や人馬の継立を行った。明治期以降も継続され開拓期の北海道で役割を果たした。

子ども心に不気味だった老爺や口やかましく激しい気性の隣の「阿母」、その一家の行く末が描かれている。一人取り残された「ばば」が印象深くスケッチされている。その家にはかつて祭文語りが泊っていて、「私」はそれをしばしば聞く機会があった。「その感動は古い民族の幽鬼たちが眼のあたりに躍動するようで、聞いていて私は膝ががくがくと震えるようであった」。アイヌの「マギリ」、松前藩の「駅逓」、「祭文語り」、「イタコ」など村の「生活史」を背景として「私」の感受性は育まれていった。上澄みの上澄みのような「京都」の「文化」に伊藤整が違和感を感じ続けたのは、彼がこういう「文化」の上に己を造り上げげたからだ。小樽高商で出会った「西洋」や、小林多喜二とともに憧れ続けた「植民地東京」の方が「京都」よりずっと馴染みやすかった。

イタコの「川端の婆」には死んだ父が憑依して、村をさすらう「私」を「情愛乞食」と叱りつける。「街」で見てきたように「私」の帰郷は傷ついた己をかつての小樽の友人や女性たちなど懐かしい人々によって癒されたいという甘えのためであった。だが、甘えるどころか厳しく追いつめられるばかり。行き詰まりの中で最後に村に頼ろうとした、というのがテキストの本筋である。父の言葉は「私」の甘えに下された最後の鉄槌であるわけだ。

「北海ホテル」に始まる小樽の空間は、「私」の過去をたっぷりと吸い込み懐かしい過去の空間とは別の「私」を圧迫する空間へと変質していた。さらに年齢をさかのぼっての「村」の空間は、より怪し気な「地霊」のようなものに変質している。後に引かれる民話も人間のより本源的な「悪」をめぐってであり、「知」のむなしさをめぐってであり、総じて人間の持たざるを得ない「宿命」の表象ということだろうか。いずれにせよ作者伊藤整は、民俗や民話の象徴性を散文の中に取り入れることによって平板な「リアリズム」を越えようとしたわけである。

2-2　民俗的世界（2）

学校にたどり着く。角田先生が出てくる。先生は「さとり」の話を始める。なんでも先回りする「さとり」を無視し仕事に励み、ついに「さとり」を滅ぼすという教訓話。「私」は「丈長」を入れた少女、二十年後の彼女と出会うことになり、この「さとり」が目の前に現れ、「私」をそそのかすが、相手にしない。

狩野派の絵師鳥山燕石の『今昔画図続百鬼』（国書刊行会　1992　稲田篤信編・解説）に、「飛騨美濃の深山に玃あり　山人呼んで覚と名づく　色黒く毛長くして　よく人の言をなし　よく人の意を察す　あへて人の害をなさず　人これを殺さんとすれば　先その意をさとりてにげ去と云」という詞書とともに大猿のようなその風体が描かれている。覚が人の心を読むという伝承と「山の怪異現象で

あるヤマビコ」（およびコダマ）は「互換性」を持つこともある（村上健司「日本妖怪大事典」2005 角川書店）。「さとり」はちょっとしたことで退散するような弱い妖怪であるという。他者の意識から自由になりえない近代人の「自我」、「関係」の中でしか実現しない「自我」の根源のような妖怪である。そういうものとして「私」が象徴化された存在。

教室を出てもしばらく「さとり」はついてくる。「―さとりってなんだろう？」という自問に、「さとり」は「―おれだよ。」と答えて「私」の「口の中へ入つてしまつた」。それから「驚くほど美しい少女」（この少女も「塩谷もの」になじみの少女）をめぐっての問答がしばらく続く。妖怪がなぜかなつかしいのは、それが私たち人間のある側面が肥大化されたものだからだ。民俗・歴史・文化・宗教・生活を取り込んだ内なる近代の妖怪を私たちは今も飼い馴らしている。

2-3　漁村の風俗

続いて「洋子」との出会い。彼女はかつての友「貝吉」と結婚している。「私」は這う這うの体で彼のもとを去る。「洋子」とも「私」は関係していた。「洋子」との過去が「隣人」に描かれていることは「街」論の中ですでに述べた。

丘の上にある「洋子」と「貝吉」の家から村の往還にある役場へ行く小路に出てくる。四十くらいの中年の女「げん」に出会う。「悪の道」に少年の「私」を引き込んだ淫猥な女。殴りつける「私」に向かってたくさんの村の男たちが責め立てる。彼女は「ムラ」の男たちの「共有財産」。財産を侵害する存在は厳しく罰されなければならない。彼女はそういう論理で守られている。貧しいムラの男たちの「性」の特異な「制度」のひとつとして。この挿話が伊藤整の少年期・青年期にあったこととは到底思えないが、伊藤整の少年期、塩谷も鰊漁・鯳漁（すけとうだら）で賑わう漁師町であった。「子供暦」によれば、村は津軽・南部からの鰊漁の出稼ぎで賑わい、校長先生は「その悪い言葉を真似してはいけません」と諭し、主人公の「五郎」は塩谷の言葉はこれでも南部衆や津軽衆よりはたしていいのかと首をひねったという。活気づく浜で男たちと女たちは乱暴でわいせつな言葉を投げつけあった。

> 鰊漁のある間特に繁昌するゴケヤと言われる三軒ほどの家にいる白粉を塗つた六七人の女たち、酔つて村道を歌つて歩く雇たち。そういうものと、子供たちの話とは結びついて、次第に性のイメージが彼らの心の中で魔物のように発酵した。（「子供暦」）

海辺に近い番屋ふうの住居

小樽の私娼窟は「そばや」を装っていた。少女に成長し思い切っておめかしをして写真を撮りに出かけたヒサ子が、街に慣れた仲間のキクに「そばや」で昼食をとろうと誘われて驚くのはそういう地域事情があった。札幌郊外の北海道開拓の村に移築されている、

小樽住吉町にあった三〼そば屋は『小樽の建築探訪』（北海道新聞社　1995）にも収録されているが、「東楼」ともなっていて、明らかに料亭の趣も備えている。普通のそば屋ではない。この三軒の「ゴケヤ」も「きそば」というのれんを出した「淫売屋であった」（「ヒサ子の生い立ち」のうち「少女の像」1949･6「風雪」）。港町小樽の風紀は相当乱れていたが、隣の漁師村塩谷も同じ様相を呈していた。より土俗的な雰囲気を醸しながら。「白首屋」的な存在は忍路や蘭島など近隣の村にも存在したであろうが、子どもたちにとって不可思議な牽引力を持った、大人になるためのうっすらと理解でき、しかし内実は何もわか

らない異世界」であった。「ゲン」との事件は役場に近い「貝殻小路」で起こるのだが、ここは文庫歌（ぶんがた）や穌間（ほっけま）という漁師集落に隣接しているところ。小樽では観光資源となっている大きな番屋の建物らしきもの（ただし、山崎さんによると番屋ではない）が、ここでは無造作なまま、役場跡の近くにまだ現役の住宅として残っている。鰊漁はやや尾ひれがついているだろうが、景気のいい時は二か月程度の漁期で一・二年分くらい稼ぐと言われたようだから、「内地」からの「雇」たちの懐も瞬間的には膨らんでいただろう。鰊漁の不振とともに「ゴケヤ」も消えていった。塩谷でも浜の子の気質と伊藤整少年たちの住む農民や公務員の住む里の子・山の子の気質は相当に異なっていて悉く対立しており、里の子・山の子は常に劣勢に置かれていたようだ。むろんハマの子たちの方がませていただろう。子どもの世界も社会の縮図。その中で「理想」の衝動に動かされない伊藤整の現実的な社会認識が育っていく。

2‐4　民話的世界（1）

「私」は村はずれにさまよってゆく。空腹に耐えかねて「あすこへ行けばいい」と「私」は思い浮かべる。つまり、すでに餓鬼道に落ちて天の邪鬼と化しているいるのである。「瓜子姫」の家。伊藤家のすぐ近くの年長の小林北一郎の家が想定されている。小樽中学に通い始めた際、小樽の緑町に別邸を持った小林家に伊藤整は寄宿させてもらっていた。「自伝的スケッチ」には、塩谷の「その家は大きな萱葺の古い家で、白壁の土蔵があり、家の周囲には土堤を築き、また何十年も経った巨大な柳の木が鬱蒼として家の周囲に立ち並んで、暗いかげをなしていた」と、ほぼ「村」と同じように描かれている。瓜子姫の家を「私は知つている。これがあの家だ」という確信は天の邪鬼の「異能」と読むべきだが、実際の伊藤整の認識がかぶせられている。くりかえせば、幻想空間の村は、塩谷の村の実際の風景によって奇妙な現実感を生み出し、小説の「リアリティ」を作り出しているのである。地理好きの鏡花が幻想世界を作り出していく前提として、いかにも「現実」らしい空間をつくるためにいかに腐心したかはよく知られているが（『文学の風景　都市の風景』『文学の認知空間』）、伊藤整はそのために、塩谷の村の実際を生かそうとしたのである。

「瓜姫」が引用されているのは餓鬼道に陥った「私」に最もふさわしい民話だからだろう。「私」は天の邪鬼という満たされない飢えにとりつかれた餓鬼、あるいは長い爪をはやした畜生と化して、北海道弁で語るかわいらしい瓜姫を襲う。つまり既に地獄の世界に陥ってしまっているわけである。天の邪鬼は天探女に由来するが「きわめて多面的であり、その正体は謎に包まれている」（前引「妖怪大事典」）という。「天の邪鬼」と「さとり」、また「こだま」や「やまびこ」はともに山の神の妖怪化したものであって、「瓜子姫」の基本の形式は、「川を流れる瓜から姫が生まれ、爺婆の留守に機を織っていると、天の邪鬼が来て姫の身代わりに成りすますが、ついには化けの皮をはがれる」というもの。天の邪鬼の所業は西南日本では姫を縛るだけだが、東北日本の一帯では姫を殺したように語られ差異があるという（以上『日本民俗大事典』吉川弘文館）。母の語りはやはり東北日本型。エッセイ「母のこと」（1,957）によれば、青森から移住したであろう鳴海家を実家とする母タマは土俗的なユーモアに富み、「ほとんど一流の物語り手」であって、昔ばなしがうまく何度聞いても飽きなかったという。語り口の鮮やかさは作者伊藤整のものだが、母の語り口のパスティーシュだろう。

追われ逃げ惑う天の邪鬼の「私」に母がやさしく慰めてくれる。村をさまよった「私」はいつの間にかふるさとの家にたどり着いている。「お前は天の邪鬼なんかではないよ。私が話してやった昔ばなし。母の声は「天のほうからおりて来て、波のように、音楽のようにあたりに満ちひろがった」。ここはちょっとびっくりするような典型的な母性思慕の世界。似通った場面が漱石「硝子戸の中」（三十八回）にあった。「夢だか正気だか訳のわからない」ものに脅える少年の「私」に母は優しく語

りかけてくれて「私」は安心して眠ったという。「村」の「私」も『硝子戸の中」の夏目金之助少年のように「またゞんだんと眠りのほうへ落ちていつた」。

「私」を「情愛乞食」として村から出ていけと告げる、抑圧し押しかぶさるような父と、民話的語り口で私を慰める母の対照はフロイト心理学あるいはユング心理学の教科書のような世界だろう。「赤いうぐいす」も東北日本に流布する残酷な「継子いじめ譚」。漁場育ちの母は気性が強く言葉も浜の人たちに似ていて、父の広島訛りと対照をなしていたと、伊藤整は前記「母のこと」などで書いている。「赤いうぐいす」の継母は夫の留守を狙って先妻の娘姉妹を殺してしまい、姉の死骸は流しの下、妹のそれは便所の脇に埋めて隠した。家に帰った父は不審に思うが季節外れの鴬が飛んできて歌い、流しの下と便所の脇へ飛んで行く。

旧伊藤家横　稲穂沢川

父さん恋しやほうほけきょ　京の鏡はもういらぬ　父さん恋しやほうほけきょ　京の手箱はもういらぬ（「村」では「帯も襷もいらねども　父さん恋し、ほうほけきよ帯も襷もいらねども　父さん恋し、ほうほけきよ」）。

怒った「父さん」は継母をまないたに載せて叩き潰した。飛散した肉は蚤に、砕けた骨は虱になった。瓜子姫の民話にも「赤いうぐいす」にも、餓鬼（「満たされない飢え」）、畜生（私の「手足の爪や鱗のようなもの」の生えた肌など）あるいは修羅という六道輪廻の要素が混入している。本格的な地獄めぐりは、後に得能和尚の説教によって語られるのだが、「私」は「餓鬼」の悪行を重ねている。

2‐5　民話的世界（2）

家の横の崖下。鼠の集まるところ。「私」は猫になっている。旧伊藤家を横切って流れている稲穂沢川はその前で暗渠化され村の往還に至って地表に出、そのまま海に注いでいるが、川は地表を抉ってかなり深い處を流れている。川波に面して平らな石が横たわり、洗濯炊事に好都合だったように見える。少年伊藤整もここでよくザリガニ取りなどをして遊んだ。細い川だが谷に近いこともあって洪水時は急流となり、弟が流され九死に一生を得たというようなこともあった。鼠は表情のない人間そっくりの顔をして、その川岸で宝物を洗って磨いている。いくつかの話に分岐して全国に広がるねずみ浄土―おむすびころりん（「地蔵浄土」）の一形態である。彼らを襲撃し、金銀を叺に詰めて「私」は寺のほうへ行く細道」を歩いていく。だが、荷物は重く「地蔵尊」が見えるたび少しずつ捨てるしかない。最後は黄金の地蔵尊だけが残った。「今ではこの一体の地蔵尊はもう財宝なんかではなく、悪行を潜り抜けてきた私に残された能化の尊体であった」。能化（所化）とは衆生を教化する菩薩。私を寺へと導き、また最後まで脇に抱えている地蔵尊のイメージがこのあたりで際立って来る。

地蔵尊は私たちに最も身近な仏。地獄に落ちた亡霊どもの救済に最後まで関わってくれる尊像。地獄まで現れて亡者たちすら救済してくれるというこの地蔵菩薩信仰は村の境界を守る道祖神と習合し、村はずれに多く安置された。テキストにあるような「三三地蔵」を塩谷にみることはできなかったが、塩谷墓地の奥には地蔵尊が祀られていた。どこにでもある風景だろうが。徳源寺には古いものではないが、檀徒たちが寄進したであろう地蔵尊が外壁の内側に数十基並んでいた。住職に尋ねることはさし控えたが、そうした風習が塩谷ではあるのであろうか。地蔵尊はヒンズー由来だそうだが、正統仏典の中では民間信仰的側面が強い菩薩のようだ。長い都市の街歩きの中で多くの縛られ地蔵な

どを見てきた。六地蔵は六道輪廻とのかかわり。つまり六道どこへでも立ち現れて代受苦をしてくれる。むろん人間界にも。

2-6　和讃

民話と同じようなことは、「和讃」の引用についても言えることだ。「聖書」が讃美歌のような「歌」によって人々を引き付けてきたように、仏教も「和讃」や「声明」などの「音楽」によって信仰を広めていった。「声明」は僧侶たちのものだが、「和讃」は高僧たちによって作られたものとはいえ、ご詠歌と同じく民衆の祈りの具体化されたものであり、つまり、仏教と交差した時の民衆の姿がより色濃く浮かび上がってくるものだろう。下の方から巡礼の女の和讃が聞こえてくる。女たちの一人は「街」において色内駅の共同便所から飛び出してきた女。光背を負った天女のようで仏への帰依を進める。彼女も「天人界」という「六道」にまだとどまってはいるが。振り返ってみれば、彼女は多くの「街」の幽鬼と異なっていた。彼女は「私」との子どもを残した執着で「無間地獄」に漂っていて、子どもが「私の方へ来るのよ。お母ちやん、つて。あなたも来るがいいわ、この地獄へ」と「私」に呼びかけていた。つまり、「村」においては、地蔵尊によって「無間地獄」から救済された「光背を負った」天人界の女として、「私」を導いてくれているわけである。きのうは地獄へと誘っていた女は、今日は仏の世界へと「私」を導く崇高な女へと変貌している。「街」と「村」の位相差を最も具体的に見せる脇役である。

3　地獄めぐり

女に勧められるまま「得能和尚」の説法の場へ。「得能もの」の「得能」もこの和尚の名前の借用だという。塩谷には二つの寺がある。真宗大谷派の暁了寺と曹洞宗徳源寺。テキストには坂の上にあるとあるから徳源寺のようにも見えるが、鐘撞堂は暁了寺にはあるが徳源寺にはない。伊藤家の菩提寺は暁了寺。この二つの寺院のつなぎあわせとしておくしかない。山崎澄子さんによれば、暁了寺和尚は代々吉田氏だという。先に引いた比較的大きな「塩谷もの」である「ヒサ子の生い立ち」の「童女の像」（1948　「風雪」）には童女ヒサ子がたちの悪い子守仲間に引き込まれて、ひそかにお寺の賽銭をくすねる場面がある。伊藤整常套の「罪と穢れ」の場面だが、ここは明らかに暁了寺。本尊の阿弥陀仏の横の通路の壁に「地獄極楽の絵がかけてあった」。「ヒサは息が詰まりそうだ」。この地獄極楽図への恐れは「ヒサ子」ならぬ伊藤整少年の記憶の反照と見ていいだろう。

真宗大谷派暁了寺

和尚の地獄めぐりの説法の中で、「私」はうとうとと眠り込んでしまい、気がつくと「行路病者」にされている。人を愛したり憎んだりした過去が思い出されるが、「あれは私のことだつたのだろうか」。「私」は棺桶に詰められ葬送が始まる。この道筋は村の往還から一本入った山裾の道と見ていい。この道を進んだ左手に塩谷墓地があり、その奥に焼き場があった。進行方向右手の斜面の、現在市営団地の公園になっている所は伊藤家の畑地であったはずであり、つまりその崖下に伊藤家は位置していた。道の脇に咲き乱れるすももの匂いは伊藤整にとって官能的であると同時にしばしば気味の悪さを伴っていた。

> 割合に古い街道に沿うてきつと李が植えてある。流石の悪童たちも此の木ばかりは近よれない。それが繁り、畑と道とを絶対的に隔てている。開拓使時代の国道だとか、寺へ行く道、墓へ行く道、

> そういう処にはきつと李が道の片側に大きく枝を拡げている。花は白く、子どものときには美しいとも思わなかつたが、その匂ばかりは強烈で、幻惑しそうである。（「雨と雪」七「草木の憂い」）

旧伊藤家の裏手にある塩谷墓地への道を歩いてみれば気味の悪さはこの墓地ゆえのものであったのがすぐわかる。山崎澄子さんによれば、新築した山崎家の脇にあった旧伊藤家住宅は塩谷墓地の火夫が時折泊っていたという。「試胆会」（1937・２「文芸汎論」）にこの塩谷墓地のことが描かれている。国道を挟んで向かい側の斜面の奥に塩谷神社がある。この神社も深い森に囲まれ鬱蒼としているが、神社側から「けがれ」を理由とした墓地の移転を求められたこともあったらしい。

人々や樹木などの噂話が聞こえてくる。冥府での審問に先立つ「予審」なのであり、「悲しみや恥や嘆き」の自意識の声でもある。この樹木の声について、野坂幸弘はやや晦渋な論理でロレンスの樹木崇拝、樹木に関わる「メタフィジックス」に契機を持った伊藤整の「草木の世界」を読み取っている。ロレンスに促され、伊藤整においては「深い生存感の不安」として累進されたという（「「幽鬼の村」へ」（『伊藤整論』1995　双文社出版所収）。

- 十八九の頃、あれは煩悶して自問自答していた変つた少年だつた。
- あれは若い女とこの道を歩いてきた。みんな過ぎてしまつたことだ。
- あれは生きたということがよくのみこめなかつたらしい。愛そのものよりも、愛という言葉のなかにある人間のさまざまな心や衝動や願いの意味の分裂を持てあました男だ。
- 心が弱つて、「郷愁」で戻って来たのだが、そういう時に戻つてきてはならない。
- みんな、まざりものばかりだつた。楽しさはにがさと。笑いはあざけりと。創造は自己否定と。恋は汚辱と。愛は疑いと。

すべてが消耗の一生という認識。—こういう暗い人生の認識が「私」に重くのしかかり、草木は地獄へ落ちるしかない「私」の行方を語り合っている。やがて焼き場へ。寺の手前で行き暮れていた「私」に信心を進めてくれた女だけが付き従ってくれている。火葬場のある墓地の亡者たちの声が聞こえる。そしてついに「私」は火にかけられ、「火の玉」とともに灼熱地獄の「七山七谷めぐり」が始まる。そして「冥府」へ。

冥府では「人間性」をめぐっての審判の問答が交わされる。冥府の主は「おれを動かしているのは、おまえが信じなかったその人間性だ」と言う。「私」は「人間性」など「浮動しやすく」、「人間同士の表情の愚劣さや卑しさ」とつながっていると反論する。冥府の主は、ならばそのことに気づかない生き物に生まれ変わるといいと語り、裁きの場の狂騒の中で「私」は海鳥に転生していく。

４　転生

「私」は村の火葬場の裏山の奥の海にそびえる窓岩の断崖の上を飛翔している。幻想の物語「村」は「街」と同じく、実際の塩谷の地理空間の上に出来上がった世界。だが、「村」に具体的地名が表れるのは「窓岩」だけ。窓岩の下は現在日本各地にある「青の洞窟」の小樽・塩谷版として観光地化されているが、ここに登ることはできなかった。小樽高島から忍路にかけて、海水場として賑わった塩谷の浜辺や漁港は別として一帯は切り立った断崖が連続している。「窓岩」を想望しながら忍路の竜ヶ岬をトリカブトの群生に驚き、熊に脅えながら歩いた。写真で見る窓岩の光景に変わらない。観光地化された高島岬から赤岩海岸・山中海岸・オタモイ海岸・窓岩と立岩・そして塩谷の浜を挟んで忍路の竜ヶ岬へと絶壁の断崖が続く。伊藤整少年はこの海岸に沿った道をかつて父に導かれて辿った

(「崖の道」)。

海岸育ちの伊藤整少年は海に親しんでいた。「ビイチパラソルの下に寝そべつてソオダ水を飲んでいる程度」のものは、「街頭の延長、文明社会の生活」に過ぎない。海はそういうものではない。潜って貝を探した記憶。貝類が生息するのは立岩の周辺だろう。

> (海においては)無慈悲な絶対な自然の中に身をゆだねるのであるから、少しの油断もなく自分の全力を注いでいなければならぬ。(略)しかしこういう無慈悲な絶対力の中に身を置いてみるのは、身の引きしまるような類のない強い緊張を感じ、自分の生命を掌に握つているような興奮を覚える。(「雨と雪」六「原始人の世界」)

断崖の下の海は「死」を誘う空間の定型。その「定型」に伊藤整は「自分の生命を掌に握つているような興奮を覚え」ていた。海鳥に「転生」した「私」は波に漂う若い女の水死体の近くへ舞い降りて行く。「こういうことが前にあった」と詩「悪夢」が引用される。

忍路龍ヶ岬

わびしい故郷の海。そこに昔のままの姿で「お前が死んで浮いていた」。信じられないことだが、「私」は「灰色の大きな鴎」なので言葉も出ず空に輪を描くことしかできない。「こんなことになった二人の過ちの結果」はどうしようもなく、「私」は「さめざめとお前の上で泣いてゐた」。

「これと同じことが前にあつた」。月夜の浜辺で白い浴衣を着た女と海で死のうと誓った。「かりそめの言葉は、なに一つなかつた」。このように「みんなこうして事実となつて現れている」。もう人間ではなく幽鬼ですらない一羽の鳥に転生した「私」は、ただ波の上を漂っている。「悪夢」の心中場面の「浜辺」は、小説では窓岩の断崖に変換された。

こうして塩谷の山中の入口(五助沢)から始まった「歌物語」は海という出口での「死」によって完結する。自作の詩はテキストの最初と最後に集中している。「現代の歌物語」として幕を開き、また幕を閉じようとしているわけだ。だがテキストは「悪夢」で終わらずすぐ続いて、最後は「海の捨子」(『冬夜』所収)の引用が重ねられる。「海の捨子」は「悪夢」と一見似た世界だが、浪に漂う愛人の死を鷗になった「私」が悲しむという詩「悪夢」の構図は、「海の捨子」とは別のものだ。

> でも今に私は忘れるだろう /(略)私は浪の上を漂つているうちに / その村が本当にあつたかどうかさえ不確かになり / 何一つ思い出せなくなるだろう / 浪の守唄にうつらうつらと漂つた果て / 私はいつか異国の若い母親に拾い上げられるだろう。/ そして何一つ知らない素直な少年に育ち / なぜ祭りの笛や燈籠のようなものが / 心の奥にうかび出るのか / どうしても解らずに暮すだろう。

「おまえ」との「心中」という「物語」が排除され、浪に漂うのも「私」。辿ってきたような「現実」も「夢」も「怖れ」もすべて昇華されて、孤独感はひたすら己の「捨子」の観念に抽象される。この一編の詩の引用でテキストの深度はもう一段上げられる。< 幽鬼 > の物語は無垢な少年への転生の憧れによって浄化される。

林檎の花の抒情的な恋愛の記憶、そのことに象徴される、「情愛乞食」のふるさとよる「救済」への願いは、「街」と同じく、しかし「村」ではより土俗的・民衆的・地霊的なものによって拒まれ、地蔵尊や和讃など庶民的救済への祈りを生み出しつつ、海鳥に転生し、最後に「何一つ知らない素直な少年」へのさらなる転生を願う悲歌で終わる。このテキストにあって、「眠り」が「原存在」とでも呼ぶべきものへといざなう契機として方法化されていることは例証するまでもないだろうが、このどこへ行きつくやら見当もつかない「眠り」は「死」へ、そしてついには「転生」によって完成形となる。崖の道で地蔵尊を負った「背の荷」の重みは、「私」の「過去」の罪障が己の背に蓄積されたものと読むことができるだろう。「転生」によってそれらはすべて無にされる。己にもはっきりとしない懐かしい過去のイメージをかすかに、かすかに漂わせながら。

5　おわりに

伊藤整文学碑

「海の捨子」はトリカブトが群れて咲くゴロタの丘の碑に刻まれた詩だが、伊藤整の「孤独」と「不安」、そして深い故郷回帰の思いが綴られた詩である。この詩のイメージをテキストの最後に引用することによって、「物語」の中に「私」を融合させるという『街と村』の伊藤整の試みは現代の「歌物語」として高い結晶度で結実させることができた。だが、こういう試みは繰り返せるものではない。散文詩のような「浪の響きのなかで」があるが、それは「捨子」の習作のようなものに過ぎない。伊藤整の文学は「海の捨子」のような方向を辿ることはできなかった。詩人として生きることを断念してしまった伊藤整の哀しみが塩谷の村と海を見渡せるゴロタの丘の碑に漂っているかのようだ。

幻想のこのテキストが、実際の塩谷の村を舞台に展開されている様相を確認してきた。舞台は単なる幻想のそれではなく、伊藤整の塩谷の村への深いかかわりによっていて、奇妙な「リアリティ」を確保していることを確認したかったのである。

この独自の「リアリティ」は、いくつかの詩編の引用によってもたらされているのは、誰でも一読すぐ感じるところだろう。だが「引用」は詩編だけではない。テキストのいくつかのエピソードには既に書かれた塩谷の物語群が先行・後行している。伊藤整の文学において「塩谷もの」ともいうべきテキスト群が相当量を占めているが、それらの引用も含めて「村」は成立している。（佐藤義雄）

補注

＊　当時京都教育大学助教授であった佐藤義雄と、近代文学ゼミ（1985 年卒）岩佐純子、笹部昌子、平居謙による旅団

＊＊　文学紀行の方法論を観光学に援用すべく社会人講座「大学コンソーシアム京都　京都力講座」や総合文學講座「ＭＪＳＫ」のオンデマンド講座「近代文学を歩く」等における講義を佐藤義雄先生ご本人に長きに渡って担当いただいている。具体的リストは以下の通りである。社会人講座「大学コンソーシアム　京都力講座」の「外側から見る京都」では毎年同書の著者・佐藤義雄（明治大学名誉教授）に 2014 年度より依頼。「川端康成『古都』を読む」「志賀直哉『暗夜行路』（第 3）を読む」「梶井基次郎　京都のテキストを読む」「志賀直哉〈山科もの〉を読む」「都市の表象と文学」等の講義を

頂いた。2019年には三島由紀夫『金閣寺』に関する詳細な調査資料の紹介などの回もあった。このプロジェクトは現在も継続中である。またオンデマンド講座「近代日本の文学を歩く―文学の認知空間」として「芥川龍之介『蜜柑』と横須賀」「夏目漱石『それから』と東京」「山川方夫『夏の葬列』の湘南」（以上　ＮＨＫ京都文化センター　2021年度4月―9月分）「芝木好子『洲崎パラダイス』を歩く」「泉鏡花『売色鴨南蛮』の世界」「伊藤整『幽鬼の街』の小樽」（総合文藝企画MJSK　2021年度10月―3月）「伊藤整『幽鬼の村』」「山本周五郎『青べか物語』と浦安」「深沢七郎『笛吹川』」（総合文藝企画MJSK　2022年度4月―9月）、そして本稿執筆時点で黒井千次『たまらん坂』、三島由紀夫『金閣寺』、大佛次郎『幻燈』に関する撮影及び調査を終えている。

現在の観光は、過度に消費に傾いている。観光行動の中に精神性を取り戻すための手段として、「文学紀行」の方法はヒントになると考えている。（平居謙）

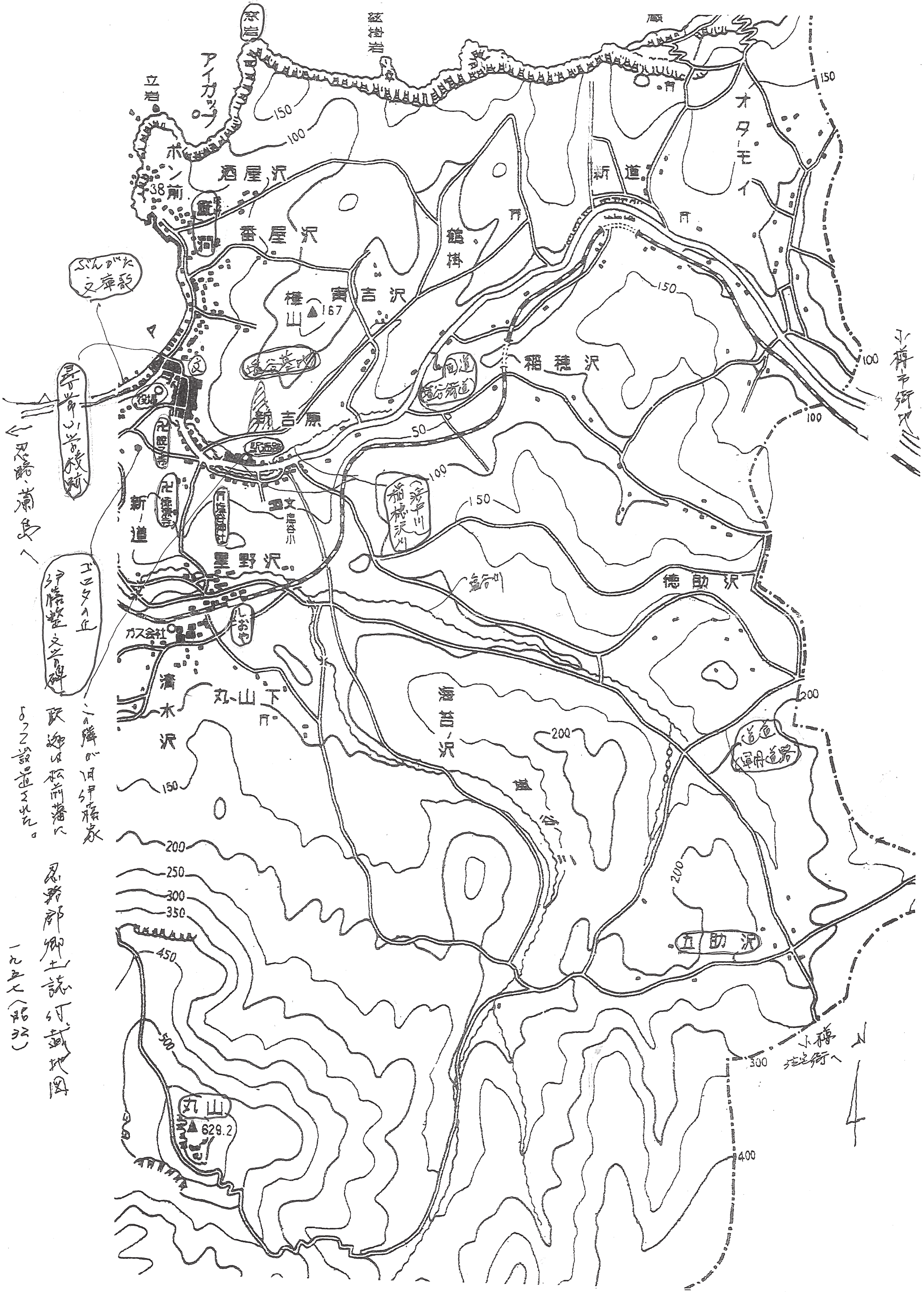
1-1　「村」の、伊藤家のあった所に生まれ育った山崎（原川）澄子さんが送ってくださった『忍路郡塩谷村村政一班』（1933）の該年度農産統計資料によれば、蔬菜に次いで多い果実のうち、圧倒的に多いのは桜桃だが、ブドウがそれに続き、リンゴがそれに迫っている。現在塩谷ではあまり見られないりんご園は当時の五助沢の実景と見ていいのかもしれない。（佐藤義雄　以下も）

1-1　「レギオン」の一節といい、脊に負うた地蔵尊といい漱石『夢十夜』との関係は誰もが思い浮かべること。「母」の声は「天のほうからおりて来て、波のように、音楽のようにあたりに満ちひろがつた」という「村」の記述は、少年の不安が母の言葉によって消え去り、安心して眠りに落ちていくという「硝子戸の中」（第37回・38回）の記述の「写像」だろう。

２－２　「角田先生」は実名。尋常四年生ころの担任教師。当時三十二・三歳。塩谷には珍しく仙台の人。母親と二人暮らしの独身で、「級で僕を一番愛してくれた」先生（「自伝的スケッチ」）。

2-3　改めてここで山崎澄子さんが送ってくれた先の資料で塩谷の水産業の統計資料を確認しておきたい。「職業別戸数」は総戸数1142戸のうち水産業430戸（約4割、）日雇274戸、農業217戸。漁獲高310,918円のうち鰊148,280円、鯱（すけとうだら）135,144円。この二つの漁で9割を超えている。水産業の多さは当然だろうが、目につくのは日雇の多さ。農業の日雇いもいるだろうが、漁業の日雇が多いのが原因だろう。番屋の季節労働者はここに含まれてはいないと思うが、季節労働の後そのまま塩谷に定着した人たちもいたはずである。

3　伊藤整研究・伊藤整伝記のスタンダードを築き上げた瀬沼茂樹の河出版全集第二巻「解説」には、「得能という姓が（「幽鬼の村」に）暁了寺の得能和尚という名で、すでに登場していたのを知ろう。浄土真宗の僧侶で、得能は実名であるが、この音がトリストラム・シャンディの音に近いところから、得能五郎を選んだという」とある。これが通説になっている。だが、「村」の寺はテキストでは「暁了寺」とはされていないし、「坂の上」と位置も変えられている。曽根博義の『伝記伊藤整』の「当時、その寺（暁了寺）に犢野芳浄という僧侶がいた」「名はそこからとられている」というのが正確なところであろう。だが、私たち読者は暁了寺「得能和尚」が代々の住職であったかのように思ってしまっている。代々の住職は「吉田氏」という山崎さんのご指摘に驚いたのはそういう事情による。犢野芳浄は代々の住職ではなかったかもしれないが、そのことも含め、曽根博義が何を資料として記述しているかは不明だし、犢野芳浄とは誰か、その全体像も明らかになっていない。



忍路郡郷土誌付載地図
一九五七（昭32）
オタモイ
酒屋沢
番屋沢
寅吉沢
稲穂沢
新吉原
星野沢
徳助沢
清水沢
丸山下
五助沢
新道
丸山
629.2
167
ガス会社
小樽市街地へ
150
100
200
250
300
350
400
450
500